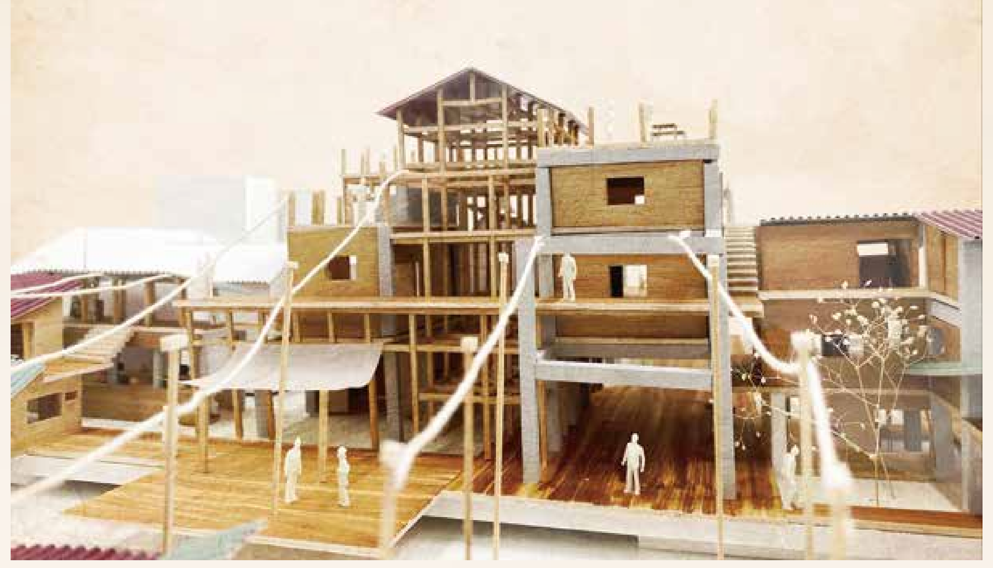
生残る痕跡群

ー 品川浦に残る増改築の形態を継承した都市に現る開拓式水辺建築 ー

痕跡の集積が街並みを修繕していくかのように



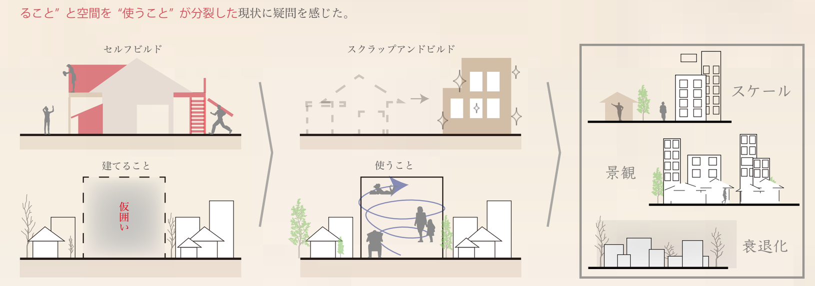
先代が築き上げてきた漁村集落のセルフビルドが

川の流れとともに再び街へと躍動する

消えていく建築の痕跡

世の中には、長い年月の中で"部屋を拡張したい""ベランダを付けたい"などの様々な欲求を受け止めながら増改築を繰り返し続けた建築が存在する。使い手が空間に関わり、増改築をしていくことで引き出される空間に建築の魅力があると感じた。

私は地域に根付いた歴史や伝統、記憶を壊していくように存在する高層マンションや再開発事業など建設の機械化によって生じてしまった"建てること"と空間を"使うこと"が分裂した現状に疑問を感じた。



残し、返り咲く居場所

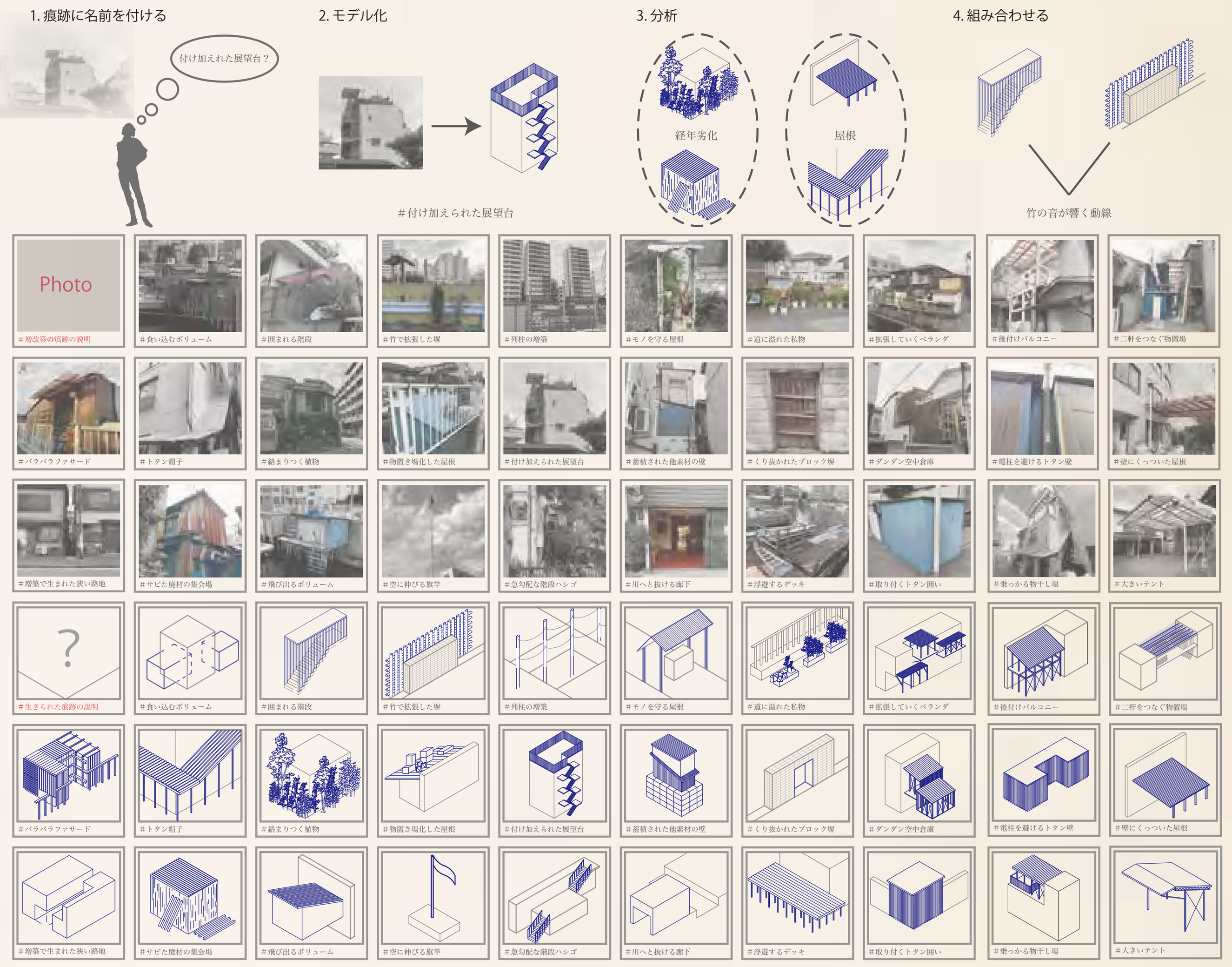
KSGP21092

面影を残し存在する痕跡の集合体は、街そのものを表現している。本計画では合理性が先行され建設の機械化が生じ、街の表情を塗り替えてしまう再開発の存在と街に流れる時間において蓄積された増改築の痕跡がお互いに協力し合いながら一緒に存在する場所を計画していくことを目的とする。お互いに強調し築き上げた場所は「生きられた場所」を残し、更新しながら現代の街の重要な居場所として返り咲く。

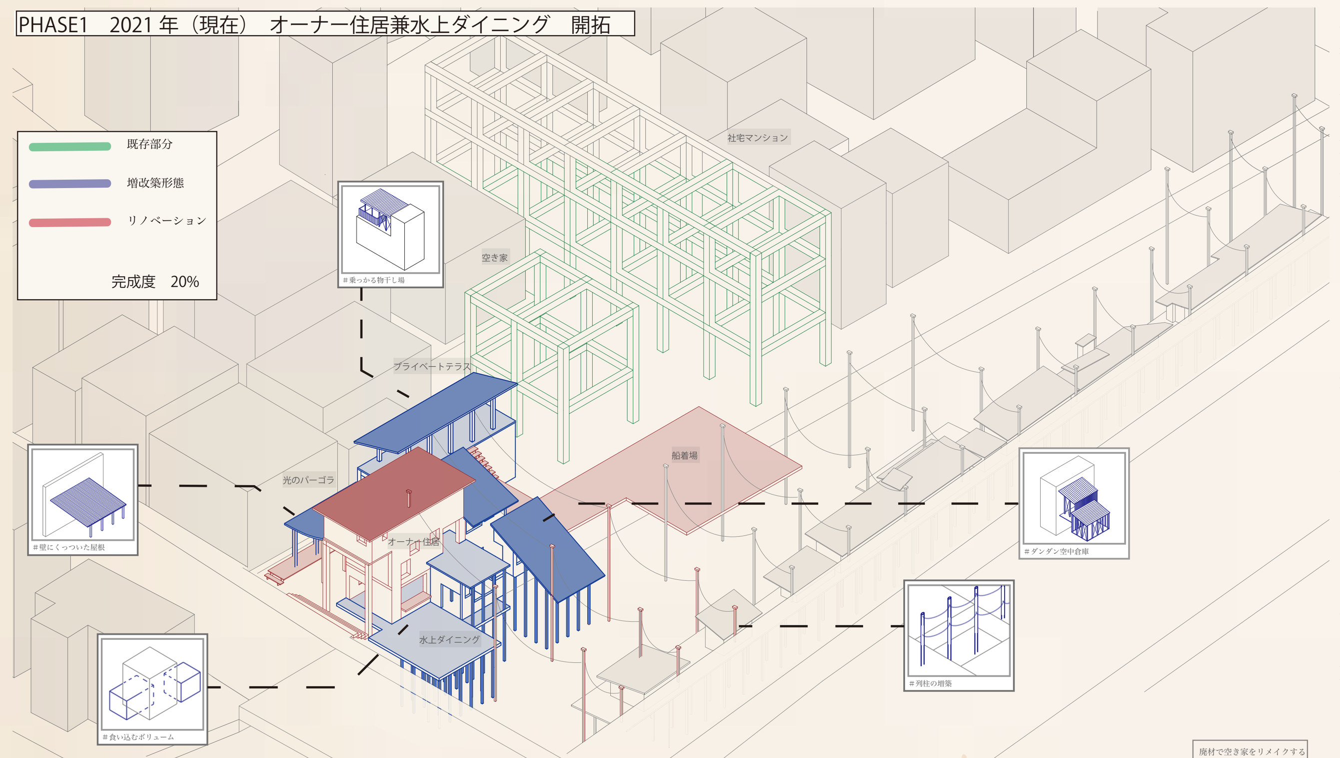
計画敷地 ー東京都品川区 品川浦船溜りー

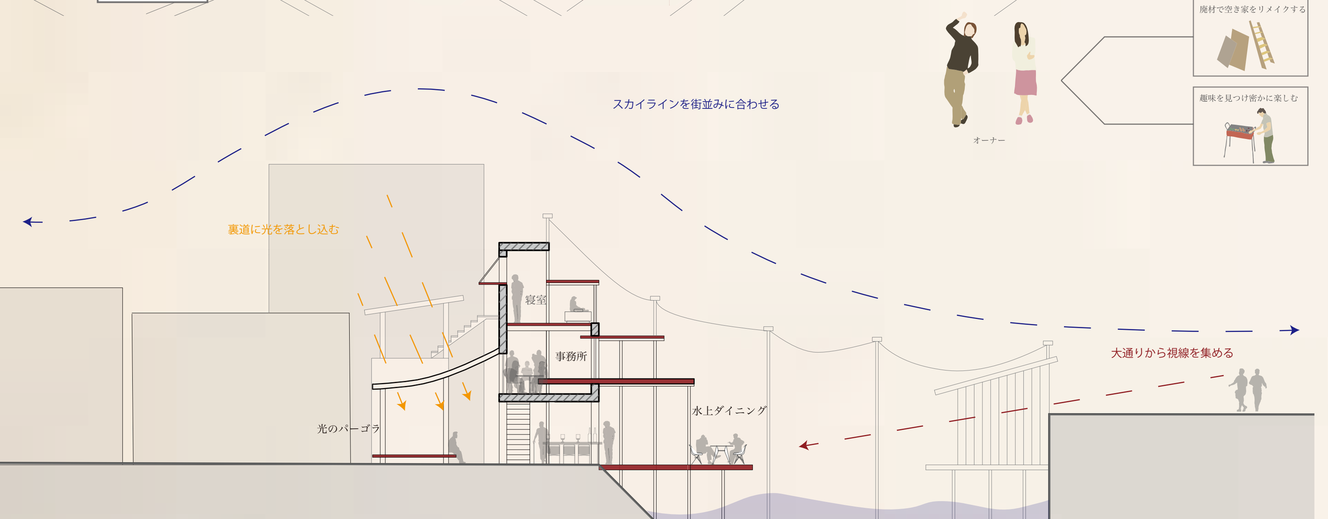
リニア中央新幹線に伴い、重点検討区域とされた品川駅南エリアを対象地域とする。更新されていく品川区から程よく距離を取る船溜りは昔、漁村集落として活気溢れる集落として存在していた。現在では漁業としての機能の活用はされておらず、街と水辺の関係は損なわれている。しかし、漁村集落特有のセルフビルド・生活における増改築たちの手垢が生き続けている。

痕跡を落とし込む設計手法　マチに点在する 29 個の増改築



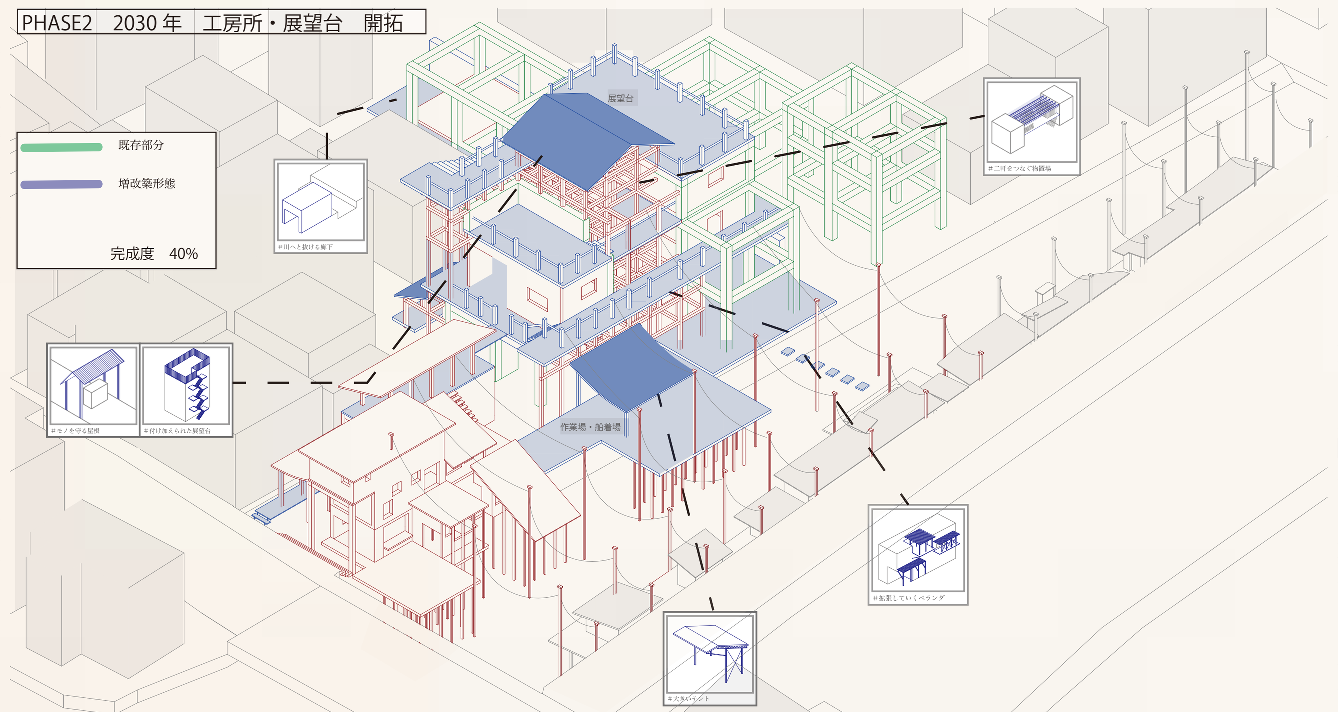
PHASE1　2021 年（現在）　オーナー住居兼水上ダイニング　開拓

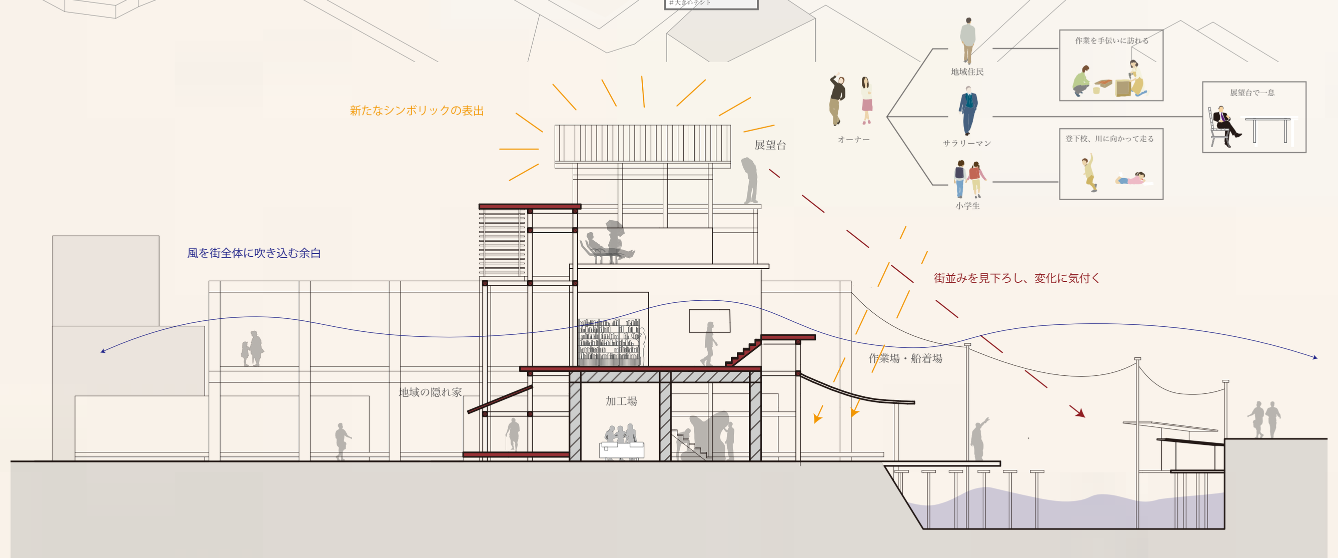




A-A' 断面図　S=1/300

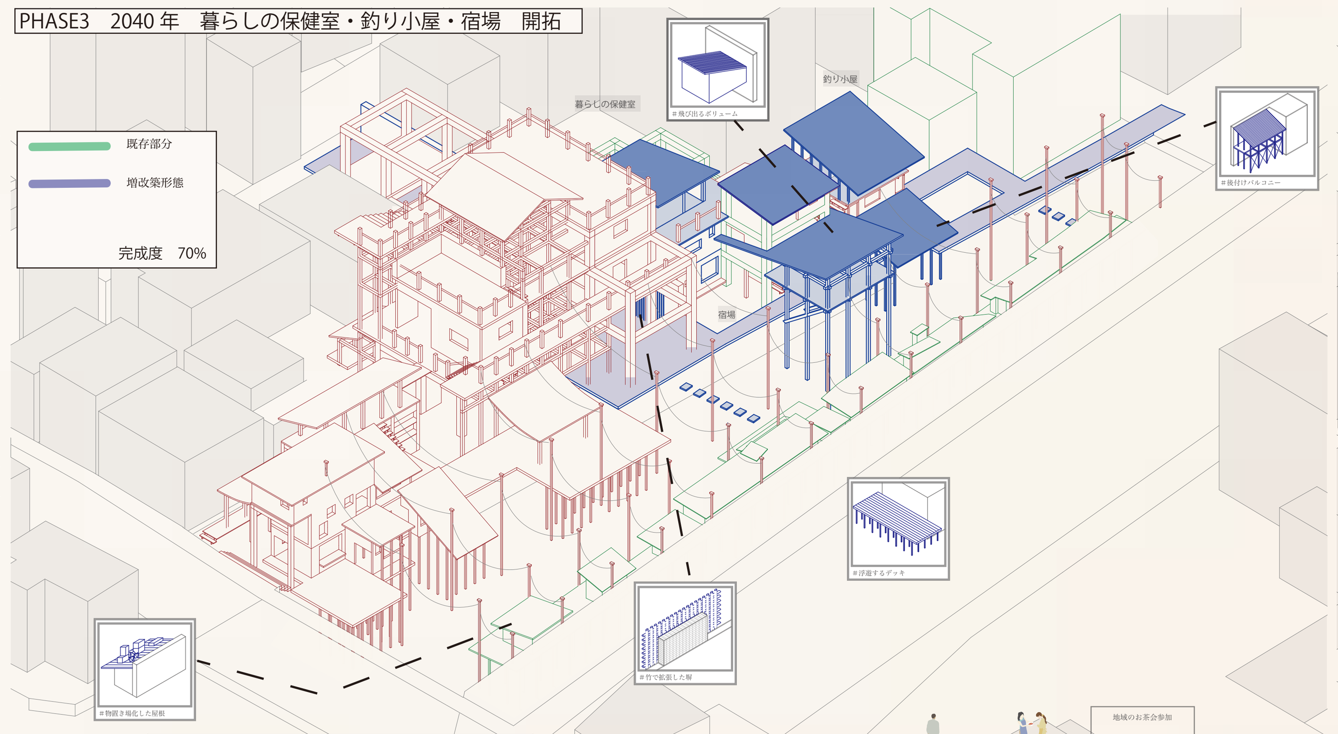
PHASE2　2030 年　工房所・展望台　開拓

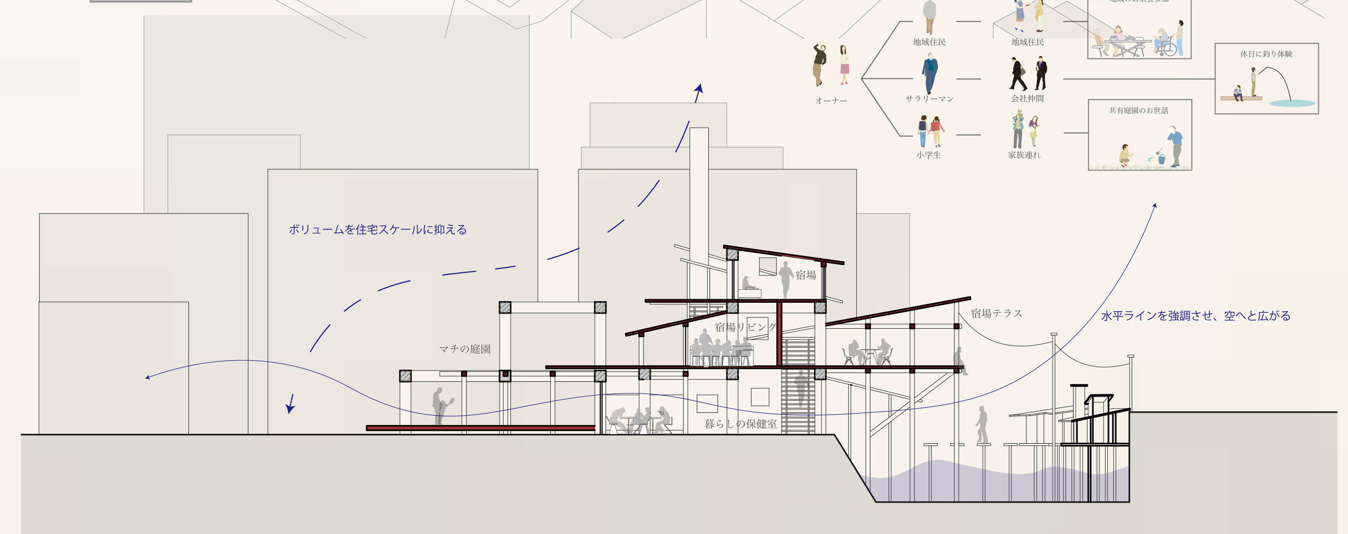




B-B' 断面図　S=1/300

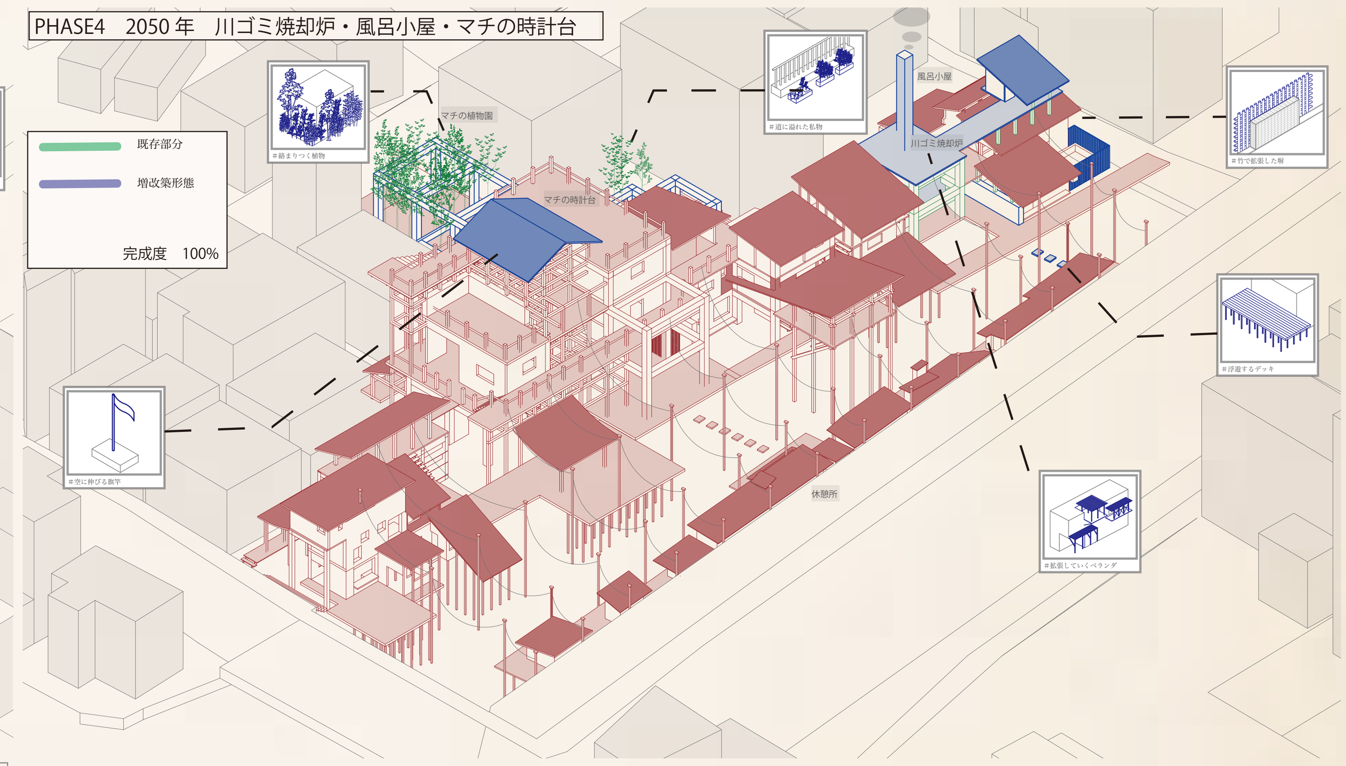
PHASE3　2040 年　暮らしの保健室・釣り小屋・宿場　開拓





C-C' 断面図　S=1/300

PHASE4　2050 年　川ゴミ焼却炉・風呂小屋・マチの時計台



1 階平面図　S=1/500

地域住民がよく通る裏路地から見たパース

地域の外部動線にオーナーの出来事が溢れ出していくと共に、光のパーゴラが街の人とつなげるハブとなる。

水辺空間の始まりである水上ダイニングを橋から見たパース

衰退し続けた水辺空間をオーナーの改築によって活気溢れる場所へと蘇る。

満潮時に現れる浮遊するデッキから見たパース

人と川が離れたこの今日において、川を横断することは都市では体験できない居場所が徐々に見えてくる。

マチのシンボルとなる展望台から見たパース

開拓されていく状を眺めることができるとと同様に、再開発が進むに連れて痕跡の集積が輝き始める。

経年変化が楽しめる街の庭園から見るパース

地域住民が手入れを行い自分たちの居場所を拡張していく。オーナーの所有からやがて地域の財産となる。

活気溢れる川沿いと釣り小屋を見るパース

川沿いを歩くと釣りをしている人、地域住民たちが立ち話をしているなどその風景は徐々に当たり前になる。